



特別  
又 6  
9340  
7



MATSUMOTO  
松本文具店  
電番山6222

¥ 15

貴

又6

9340

7

< 2010-143 >



神山  
切山田晴をる花  
有祖

近江臨終花多平まをば又経百を縁若香塵色

順天壽欲比南山不老仙

代受状 春初 祝儀 御座り 佛さま 伏今 法 漸 是 拜 留 芳

己卯一日三日文行を強里出生の勢ふんおるる

五五了けんハモウ子

一ウルさハ包むるあり強 強の誕生

軍四の春の似左の初強の勢海さんハおてくら

一月五日振血欠幸にせらる

お籠るで胸にわけんお正月出るわけのめさありけ

旧臘三十日 御移り紅床蹴蒲團倒觸柱角裂察

本記諸三首見示答之

△夏方已見電  
申道年未終  
知多拭慮切  
併未徹室詰  
片、乾鮮瓶少  
仰精餘  
貸金  
旁懸倒

前  
見  
取  
中  
出  
一  
家  
唯  
長  
別  
第

何多正矣雖拜承心  
必覺老法為誰不仕  
新平安  
臨指為戲社年作用  
吾約就也久之狀  
倉卒開窓更仰天  
海危火粉  
連不第  
草皆藏  
先塞見每手信言  
不宣一不  
野箇  
通屋後二  
筋水  
策走  
門前無雜出  
神人助正  
月夕之  
死外年

○上月十日より豆書行前

未思身士  
秋金何足  
馳洗湯  
標未上  
豆富一  
錢之

日每見身却煩  
お結  
冷飯粗  
年家三人  
飽食不  
尽

誰言好  
了不如世  
持  
仙為之  
額  
習  
臨指  
為  
長壽

此先  
新得  
尚  
長余  
欲

宜  
家  
内  
此  
安  
全  
由  
余  
常  
伯  
先  
生  
術  
欲

在  
家  
多  
宜

將  
●

賀次回米寿年

次又仙翁所寄

以吾獨介不羈乃幸  
伯知於  
日  
是  
人  
野  
春  
來  
世  
客  
到

晴窗唯  
與  
城  
和  
親  
附  
犯  
法  
首  
在  
波  
系  
身  
表  
老  
才  
惟  
知  
計  
不

置  
額  
張  
集  
在  
會  
之  
堂  
子  
於  
臨  
指  
為

面  
會  
諸  
君  
心  
感  
焉  
伏  
山  
出  
品  
又  
何  
粗  
如  
此  
管  
局  
也  
未  
少  
空  
也  
初

昨  
早  
已  
世  
今  
場  
集  
就  
幸  
必  
出  
也  
善  
子  
信  
句  
似  
及

珍  
亦  
亦  
去  
端  
在  
表  
以  
臨  
指  
抽  
移  
在  
他  
粗  
印  
在  
合  
合  
殊  
盛  
大  
只  
恨

先  
生  
出  
席  
理  
張  
甚  
感  
名  
欠  
到  
物  
也  
二

年  
之  
集  
古  
日  
新  
家  
終  
乃  
信  
達  
情  
有  
粗  
一  
公  
山  
西  
臨  
畔  
客  
好

杯  
酒  
以  
為  
人  
世

赤  
柄  
靴  
一  
君  
在  
梯  
の  
履  
子

いつし  
ふ  
少  
う  
セ  
の  
あ  
と  
を  
ま  
進  
者  
あ  
ら  
う  
し  
を  
い  
え  
め  
ら  
う

一月二十日留津修御書 變位回を言念仕事と

賜ふる至礼也

いまだしよをそる局とありうらゝるふふニ一ぬむありうら  
ワラぬのまゝニしあの来ハ留はとさるゝやありうら  
之をけ小とありうらむハ修の所ハ修成ありうらむ

一月三十日 浅倉を久志老人 七十七才を力ありけ小ハ内由也

正月の口ふさひしと修の所ハ修成ありうらむ

呈文久仙人

又之引ゆ罷 書未ハ何疎 浅倉書物上 咳出慢談餘

正月過如夢 梅花早似 嘘先生名 快気也 石 修 在

二月二日 留見 修 留 聖 而 修 東 物 再 上 修 也

あつとぬしとありうらむ 又修の所ハ修成ありうらむ

都下のあつとぬしとありうらむ 又修の所ハ修成ありうらむ

二月九日 熱海ニ去る 修 在

修家のあつとぬしとありうらむ 又修の所ハ修成ありうらむ

ぬんやふらつとぬしとありうらむ 又修の所ハ修成ありうらむ

わうらつとぬしとありうらむ 又修の所ハ修成ありうらむ

二月十四日 送 留 見 再 赴 征

修家のあつとぬしとありうらむ 又修の所ハ修成ありうらむ

夕 月 頼 望 送 再 征 見 修 在

修家のあつとぬしとありうらむ 又修の所ハ修成ありうらむ

修家のあつとぬしとありうらむ 又修の所ハ修成ありうらむ

此母の有所 砂 何 為 又 覺 封 侯 夕 物 江 上 看 立 家

榮 在 由 未

榮 在 由 未

規 者 有 身 本 知 殿 神

修 在

修 在



二月廿七日訪以上お告の御恩と承へ

おいらのつとめと仰つておの花さくおのまゝをさへ通つて

三月十日朝 柳の白雲 白く霞をさうらふ

常のまよ言ふとさるやのなす柳さくゆるものさすやれ

出口大佳二百五十年案を出口高き比りし急名形

水防休地を贈りしニ

急名の急の訪り大人りては切りのころをいふは

急名の急の訪り

三月十日朝 柳の白雲 柳の白雲 柳の白雲

心不堪病後情烟を多難背久締盟、何達軽雨催掛  
日急理り此れ上旅程

車中偶作

而細風柔 輕暖催 和此車表 氣如煨 此の 旅好き 春好  
年見通 水部山 部抄

山類一年白雪 遮取入 深け雨脚 斜 函定 活情 花口 見わ

と到るる 所を 兼茶事 続 煮茶 某みどり 宿あり

宿中 春七 上や さらう 柳 相あ

野山 山に 汽車のまゝ 雨あり 山に 旅とらう

不二り 山に 花に くらみ ずせめ 花地 ひらら 春の あり

おの 上の 野の 山竹の 片ま ありし 花に 降ひる 春の あり

嵐の 山に 春の 山に 三河 過 柳を さうらう

機 危車 山の 春の 花を 春の 春の 春の 春の 春の 春の

此れを 春の 春の 春の 春の 春の 春の 春の 春の

あふの化の佛  
かろうと事ある  
百の神の魂を三  
とらふ

古き描の家

杉並りの縁のある唐土のいしと色こころまきまき

赤山に雨のうらみとせほのやに猫吉山うらみうらみ

大はるの雲をいとしにうらみなる雨の都の灯は

ま雨のうらみなる春の日の影のゆかりの灯を

まきまきとまきまきとまきまきとまきまき

十二日 赤山 宿 杉並り

新すまの七毛とまきまきとまきまき

赤山 宿 杉並り

赤山 宿 杉並り

赤山 宿 杉並り

夜香 香水 行法

目撃心住

僅々半上、神遊都社天、道を御火確、内柳梵表傳、

空地生草水、空山有落田、有世親自在、其佛好因縁、

杉並りをまきまきとまきまきとまきまき

杉並りをまきまきとまきまきとまきまき

杉並りをまきまきとまきまきとまきまき

杉並りをまきまきとまきまきとまきまき

杉並りをまきまきとまきまきとまきまき

杉並りをまきまきとまきまきとまきまき

杉並りをまきまきとまきまきとまきまき

三月五日 赤山 宿 杉並り

杉並りをまきまきとまきまきとまきまき

杉並りをまきまきとまきまきとまきまき

杉並りをまきまきとまきまきとまきまき



この川... 玉... 山... 珠... 丸... 自有水... 十四日... 返... 芳山...

珠山の... 丸... 自有水... 十四日... 返... 芳山... 仙佛... 不坊... 十五日... 妙...

魚... 魚...

魚... 魚... 魚... 魚... 魚...

魚... 魚... 魚... 魚... 魚...

魚... 魚... 魚... 魚... 魚...

魚... 魚... 魚... 魚... 魚...

有

雨をよまざる可くふりしに招の遠のむ小山

杯飲 ~~酒~~ 可血り

花登青山の初午陰と春琴の胎の命色来物解杯

中執且以春愁付疎塗

日寄川船一馬子帰るに初辰氏一馬子有景記

若山一理白を遮起以を何と云き厭水声妨美

睡思を衣ぬる有催東

十三日春訪塔と云る

用ひし所の有る

建ちつくヒルの窓と灯の光

子規巻 十唱 五歌 芽

春の白を春の影をしむる山道の下を歩く  
春の影を春の影をしむる山道の下を歩く  
春の影を春の影をしむる山道の下を歩く  
春の影を春の影をしむる山道の下を歩く

〇 性

ゆゑたけは実をすまふを家多の辛老の花はちり  
春の影を春の影をしむる山道の下を歩く  
春の影を春の影をしむる山道の下を歩く

伊杜の花さく中をぬる影をしむるの老花をさす

十孝 香由丸くさうのそしに及良

疎人の星し千をすちりくや

陸田以方考七堂 桜合香

陸田以と考七堂考の合はす

(お虞居地)

春蟬の音は雨のまの庭のうら白き砂に木の影は  
山吹の枝はぬれちりしるるをたてりやうまのあはる

四月二十三日 列候果之儀

鳥の音の味は紅の影にぬれちり

夕のうらまの若葉のあゆげに小鳥の影の

杉木の影のあゆげに小鳥の影の

うらうく雨のうらまのあゆげに小鳥の影の

垣根の影のあゆげに小鳥の影の

律の音の味は紅の影にぬれちり

りををぬれちりしるるをたてりやうまのあはる

表垣の影のあゆげに小鳥の影の

あやうく雨のうらまのあゆげに小鳥の影の

吉原の柳多大月ニ移りたる 卯のうらまに

けろくまのうらまのあゆげに小鳥の影の

雨のぬれちりしるるをたてりやうまのあはる

おとろと二人のあゆげに小鳥の影の

予ハ山つるに林のぬれちりしるるをたてりやうまのあはる

新うらまのあゆげに小鳥の影の

家へのうらまのあゆげに小鳥の影の

日はぬれちりしるるをたてりやうまのあはる

若葉の味は紅の影にぬれちり

夕のうらまの若葉のあゆげに小鳥の影の

杉木の影のあゆげに小鳥の影の

うらうく雨のうらまのあゆげに小鳥の影の

垣根の影のあゆげに小鳥の影の

律の音の味は紅の影にぬれちり

りををぬれちりしるるをたてりやうまのあはる

表垣の影のあゆげに小鳥の影の

あやうく雨のうらまのあゆげに小鳥の影の

吉原の柳多大月ニ移りたる 卯のうらまに

吉原の柳多大月ニ移りたる

雨  
 雲のさしあがり日ニ空はくくくくと云ふにさういふつ

ささくさく少くあまう、舞ニ水太の花ハ地ろくろく

花々の出さるれ庭に大い蓮花ありとさく

下りてをせなり軒下より新の雨のさす

細曇り印を

身往らふ舟は空ろ神のをなほはささみろ

煙をくぐりて山水の曲りて煙の情此乃所記を色

花はあま声樹あり残雪あり有吐録

維大一お南白雲

己正巢燕返又看撒子肥、巨窟窗挑燭、天を夏袷衣

破有秋并々制席由是非、寂之青山雨征人梅未成

薫  
 警  
 山花  
 草花  
 草花  
 草花

管亭  
 有東軒  
 欲出視之  
 窺他人平道

十個本台法勿と見録 穿新勝前縁並然

お日  
 お紙  
 神の  
 花

ささくさく少くあまう、舞ニ水太の花ハ地ろくろく  
 花々の出さるれ庭に大い蓮花ありとさく  
 下りてをせなり軒下より新の雨のさす  
 細曇り印を  
 身往らふ舟は空ろ神のをなほはささみろ  
 煙をくぐりて山水の曲りて煙の情此乃所記を色  
 花はあま声樹あり残雪あり有吐録  
 維大一お南白雲  
 己正巢燕返又看撒子肥、巨窟窗挑燭、天を夏袷衣  
 破有秋并々制席由是非、寂之青山雨征人梅未成

七月二日 鏡は産業病をりおと

ささくさく少くあまう、舞ニ水太の花ハ地ろくろく  
 花々の出さるれ庭に大い蓮花ありとさく  
 下りてをせなり軒下より新の雨のさす  
 細曇り印を  
 身往らふ舟は空ろ神のをなほはささみろ  
 煙をくぐりて山水の曲りて煙の情此乃所記を色  
 花はあま声樹あり残雪あり有吐録  
 維大一お南白雲  
 己正巢燕返又看撒子肥、巨窟窗挑燭、天を夏袷衣  
 破有秋并々制席由是非、寂之青山雨征人梅未成

七月十日 秋分 在野山

花火終つて人あり居たりはしの秋空うつろを思ふやま  
ささく水のそよぎる音をたてて一筋川のふしのころころ  
けむりの舟の櫂をたたくと秋意のけいさつを感ずる  
必ずや秋のふたばのふたばのあそびめ人々あそぶとよその子

お山の人々もいよいよ秋意を感ずる  
お山の人々もいよいよ秋意を感ずる

七月十日 秋分 在野山

何となくあそびたふす秋意のふたばのふたばのあそび

こころの秋意を感ずる人々のあそびを感ずる

口上あがり秋意を感ずる

秋意を感ずる人々のあそびを感ずる

夏のあつたけにまけた秋の心算を感ずる

秋のあつたけにまけた秋の心算を感ずる

閑来好坐竹居秋意を感ずる

早秋のあつたけにまけた秋の心算を感ずる

此境共

秋意を感ずる

川流のあつたけにまけた秋の心算を感ずる

夏のあつたけにまけた秋の心算を感ずる

秋意を感ずる人々のあそびを感ずる

秋意を感ずる人々のあそびを感ずる

老叟のあつたけにまけた秋の心算を感ずる

秋意を感ずる人々のあそびを感ずる

秋意を感ずる人々のあそびを感ずる

秋意を感ずる



糸雨名収十五

風送秋凉雨语急 白昼初且 疎斑名亦 介乾为字  
画天番夕初尚在山

海栲女、八月廿

暮らふ心地子為ちす 望眺望と 望極まると 方の客  
者こよ心こいり 秋へまを 栲女を 栲女を 栲女

文行子、八月廿

夏秋の上縁キ、さうさふけふ ちつさぶぐ 栲女

何処をみる

くこ垣に夕立は此の鐘のく、り出けり ちかほふりか

よふしし 雨のしりし 色苔に 栲女 栲女 栲女

白き雲空に 栲女を ちつさぶぐ 栲女 栲女 栲女

秋のてら 栲女 栲女

かろくと 勝程の 栲女 栲女 栲女 栲女 栲女

とせと栲女 ち入の 一とさつとせとせの 栲女

日はせと 雪降すく へら山 雨す来ふ 栲女 栲女

秋の 栲女 栲女 栲女 栲女 栲女 栲女

の 雪空と 栲女 栲女 栲女 栲女 栲女

八月廿 栲女 栲女 栲女 栲女 栲女

栲女 栲女 栲女 栲女 栲女 栲女 栲女

業 栲女 栲女 栲女 栲女 栲女 栲女

画題 秋風

雲の此夕日あり 栲女 栲女 栲女 栲女 栲女

くちり日にくうとせし 栲女 栲女 栲女 栲女 栲女

何處をみる 栲女 栲女 栲女 栲女 栲女

猶まは白神孝過を月夜に持てて秋の地味 出征の旗を  
つけしむと持てて秋の地味 白神孝過を

後醍醐天皇の正徳を偶ひきり 天正天皇

古を今にのせの心をもとむ 今の心は秋の地味

己察我端を又聞号外声 焦心思惑費偏向此株

生。

九月十七日 明日 天正天皇の御間 御間

家共奉りて、御間 天正天皇の御間 御間

御間 天正天皇の御間 御間

御間 天正天皇の御間 御間

御間 天正天皇の御間 御間

柳田海軍在りて、九月十七日

大地の心をみりて大地に秋の地味をまてて是也

秋の地味をみりて秋の地味をまてて是也

十九日 天正天皇の御間 御間

御間 天正天皇の御間 御間

東歸似雲法師

古書目録法山中 秋の地味をみりて秋の地味をまてて是也

秋の地味をみりて秋の地味をまてて是也

秋の地味をみりて秋の地味をまてて是也

秋の地味をみりて秋の地味をまてて是也

秋の地味をみりて秋の地味をまてて是也

秋の地味をみりて秋の地味をまてて是也







土月上口坊三本 芝三回の方ありけし  
ありめるを短冊にせんまり 佛とありける坊三本 芝三  
の聲

買込をせむ正直があらむか 木炭石豆

キ竈行枝 ~~用~~ 短冊の竹木りなるを使ふ

上げることをふかむと叫り 米たはこ 炭と米値

四第に添ふを益するはるけし 翁者短冊を止

七分搗 旨いさうだと 噓んでかき 短冊の竹木りなるを

居いゆると嘆かず三杯目 短冊の竹木りなるを

たんつを吐く人のれが ~~短冊の竹木りなるを~~ 短冊の竹木りなるを

五十八天 ~~短冊の竹木りなるを~~ 短冊の竹木りなるを 馬正の何とあり

貯金  
短冊

事件

悪たうをつるあふだけの 短冊の竹木りなるを 英松

獨りかいいるふでうぬ 短冊の竹木りなるを 英四

竹園を疎者俺うのせいじやアなアい 四四九子件

文鎮が重んぢけルが紙が赤び

えろくと腰があらつくへば角カ

親がが ~~金と火針~~ 短冊の竹木りなるを

世話やうの世話をやむ程 新入の規が

百子か子の親がうめた夕 新考査

実力があるが試験は苦にあらず

幼穉金へ入ると母親が

卵より言ひ 飼料が鶏を飼ひ

七分搗糠を棄てるやうに書か

のふの世

七公橋 晴を愛つば言いかう  
七分橋 下は戸ツツとけ民泣ぬはるる。

紙半負は減つを値は同じし

老官をする 殊勝さしありありある 大臣堂を来り

結核にありたがつてるやうに言ひ 統核す坊因る

此中おすいまかたよく業術何種 排染のビラのの 別けたるる

行すしせぬんせに我地を思へあり 俗人の 言事 増のぬ

各うなるおの西を心さちりのさう 園のいそに居るさうさう

地下流の車は定は押 車は 車は 車は 車は 車は 車は 車は 車は

地下流をぬれに沈座に灯ともる夕日のふくら丸のゆあさう

秋風 後此をさるる 地下流の 加ふるさうにさる 竹冷さし

地下流の吹く心はうらりのさうさう 書りもさうさう 心さうさう

案事書り

七公 成田の

昔河竹翁後白 自国の芋を贈る 日

は少し日 昔は昔に 松の成は不さし ぬさうさうさう

ちんちんの芽をさるる つく 松をく 柳を流す水は流る中を流る

君う畑にありさる芋の芽は 届く直々に煮てさうさうさう

素人のつらうし芋に似あしをさうさうさうさうさうさうさう

たさうさうさうさうの紐のとりくにさうさうさうさうさうさう

うれし文うさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

〇

冬の日の弱き光に暮れ 御慶の松の夜は 暮れ

若風の 行けは 烟窓の 烟の 糸は 地に 効さう

丹桂入道の 物は 然田るん 暮置くる 松の 暮さう

九丘の 度敷り 地は 心さうさうさうさうさうさうさう

み屋とぞ  
ら心ごと  
おひえぬ  
官方外係  
際係房某

姑をせむを、後ろ姑の智恵 田田徳義引ぬし

男留と豆腐とまきと出来 お肥

さうぢうの罷業さんたらたあふぢい あふぢい

解下鉄心木 あふぢい

電光石火の上え過る中右某

激きち抗議くくで多心 あふぢい

統制の正私 あふぢい

往來 あふぢい

引取れの成業にぬ あふぢい

いんふくと送るあいの あふぢい

炭材は略に引る あふぢい

大町の成業 あふぢい

四ツの海 あふぢい

豊原 あふぢい

新 あふぢい

大 あふぢい

豊 あふぢい

洗 あふぢい

つ あふぢい

お あふぢい

か あふぢい

あ あふぢい

あ あふぢい

あ あふぢい

あ あふぢい

あ あふぢい

債券で出すボナスの有難味

保健と娘スギへ子ゆき

幸始状出さぬおくり状を出し

入学金献辞の事まで送る

15日(金) 紀元二千の百年を遡りてりめあおこ

せとそいりのソク

16日(土) につくも西代の一年を区きうをりそあそいし

17日(日) 子ハ友に強ハ浦和に三折の書つうあく祝ふうし

18日(月) 4 柳屋のよきあふりしよにあそあそ老おり

19日(火) 3 おろしやをむりしあふりしよにあそあそ

20日(水) 2 皇紀二千の百年を祝ふおろしやをむりしよに

21日(木) 1 おろしやをむりしよにあそあそ

そいあつに材料

5いよとほると甲斐ややを念のあそく

2いよとほると甲斐ややを念のあそく

1いよとほると甲斐ややを念のあそく

1いよとほると甲斐ややを念のあそく

1いよとほると甲斐ややを念のあそく

1いよとほると甲斐ややを念のあそく

1いよとほると甲斐ややを念のあそく

1いよとほると甲斐ややを念のあそく

1いよとほると甲斐ややを念のあそく

1いよとほると甲斐ややを念のあそく

1いよとほると甲斐ややを念のあそく

1いよとほると甲斐ややを念のあそく

1いよとほると甲斐ややを念のあそく

1いよとほると甲斐ややを念のあそく

1いよとほると甲斐ややを念のあそく

身代り  
いよとほると  
いよとほると  
いよとほると  
いよとほると

林  
秀

負の苗あるのみ  
 苗も至れしや  
 地も違ふこと甚  
 すと  
 まつた

如鏡三君の内にととるんに

あかかとをあらわしけり此はうのちのなる  
 うらんとあらうよあめあめあめあめ  
 のそびせしはゆさうひみさうふに  
 ともあらたあらむあめあめあめあめあめ  
 日本に於ては併み代のうらむと  
 朝の日のさそ明するあめあめあめあめあめ  
 枝へてうらむあめあめあめあめあめあめ  
 朝の日のさそ明するあめあめあめあめあめ  
 枝へてうらむあめあめあめあめあめあめ

憶征戎物語昔有感

朝の日のさそ明するあめあめあめあめあめ  
 枝へてうらむあめあめあめあめあめあめ  
 朝の日のさそ明するあめあめあめあめあめ  
 枝へてうらむあめあめあめあめあめあめ

忽右何日  
 野祝柳  
 野祝柳  
 春文債僅  
 債主債未  
 一年歩む老  
 借金

何日相違い候哉  
 老又以我れを  
 債主債未  
 一年歩む老  
 借金

債主債未  
 一年歩む老  
 借金

三月征戎昔縁儲世に  
 借金

三月征戎昔縁儲世に  
 借金

借以明

三月征戎昔縁儲世に  
 借金

借以明

廿六日

借以明

借以明

送る





一月九日世地内空未甚其國氣旋在近甚

昌奇知而賦

生死策回幸以每氣亦通内机未東必自以者多

多而再結其林文字以

也却語亦似前所内家以等果如の

翻如龍抄抄更也

葵園御印時維母今在智田賦云

控筆送征三國春凱捷旨除柄唇逢迎最甚

毒兒外園の更有竹居人

其着地中似律言戎馬第辛新百初功成

華北其の軍軍蓋山

起外其軍軍蓋山

心公 懐既 甲地書卷 早夜

却見 勝

万修と金不其病氣候ふまのうらまふ心  
完ちけと初花の如二伸まけり

十三日多規庵の会に新とる歌を吟え

新の正とあまのゆふのいと多と待くも三年(うけり)

何處の程はる秋を新らる障子に日々す年の長が

竹藪のせらふとる名をたつと垣新らるく梅のえんさく

美室の荒園抄り 終らふ

日登心 時めさす過ぎぬ三々白

洋眼の十人赤きも老ゆ身は止背あふ人きり日

地下秋と出るえりの人出らる

有籍や物資不足ニ居る 新志

新方と見す元身の巨健を

一早く孫地の契心届るけり



混りあるカズチニウツクもの世に神のありふりまに  
静園の繪圖をいひけりわりのヲカニニニに取をすす  
五丁目の買り家いふ泉の三丁目を繞りてときこ  
家の先きこゆる火の台ニおくを買のつりきり  
伽曇寺の荒る神と文の志買りしをいよるに  
やとる(キ)家山何ふなくまむて買りしこい  
あふのなるたのあといひてつりあしりけり  
そよといふそら山をけあとの烟の  
やけ何とのをたつるを給川の碑をく  
室の院ちこととくわけなちの煙の底に印  
祝大村氏婿入和嶺谷持士  
七所の早筈並来死三四二番婿入在 徳元 百年

誰最祝雨祝御勝成者人

雨乞の七奉りしとていふとせに

二月七日(カ) 七日(カ) 七日(カ)

白濁にあるをさるるつらつらと美しき雪の庭の影が

二月十日白濁園子規庵永命前書

家々の灯のまをさるる厚布に掛ある雪に人かきなつて  
横田の子代田の徳助の土ませのまをさるる雪に

直に風や雪の上ほかにあけそめぬ影る切、  
化えぬのふ

ちんころいひあしるる雪のまをさるる雪に  
日比ワウツツの雪の影あつていそめぬ影る切と  
ちんころに死しる鬼をむねをさるる雪の影る切と

かめ時

大八海もすしはるすの四は神宮（うぶさき） 一房をてむ（せ）  
~~たつて（即）神牛神生もすしはるすの四は神宮~~  
 外四のあちつうよりせむがりふまるとありしものと確り法一人あう  
 初に口う出つるおそろしと知れとせむはヤむへし（うぶさき） ありとせう  
 づう人しつてゆきさす敷くおの日に 確りいかに由ゆらるる（さう  
 いはる名はやうをやういむを強きまは口に苦きもののこ  
 白米しゆらふしむありす神あつるは河原よりやをくく（さう）さう  
 四民田あう（ま） けいさかいのくさううのハチちう（お）  
 とさうさばゆましし（白）はまそ本給ふをせし神（うぶさき） のほ（こ）りり  
 許しゆいゆりますますき看煙草 百三億者言乃上（の） ちりり  
 大根をきり切りきりきり世給きり地原まをゆめむ程方れ口極  
 へあふかみんまをくまうとせ給 せりんと出るや出廻る春ぬま

新巻香（ま） のううにほつらうあうま、 罇の益に（ま） とさうにけり  
 切符制とい（ま） ばえらうとを男海（ま）  
 打層連（ま） のうわしきうはまのま（ま） 大極 祝金かかう大猫安心し  
 値まするの（ま） ともさうの（ま） に（ま） 大猫懐懐神話金此  
 れる場所駐とて（ま） 無駈のやう づん場所を留まそとの神あり  
 内まはち走したらあるま拍（ま） 言田村平田農林省で白米とくう  
 免田の民ハ千面堂を留む（ま） ちありののりみさるけふらう（ま） 山  
 温泉会に人が訪つる（ま） ぼくまの石塔をて拍の元ちる しとく（ま） 山  
~~山花~~ 山花あり（ま） 神宮のまをぬかしをうあう  
 香木は煙ろとる（ま） 花柳を若きおにさうあう  
 ちりまを送むゆのには左廻らせ山崎山（ま） ちりり  
 ちりあうのの（ま） 大極 香も大極 香も大極

野菊抱玉の  
信期千里水程  
为別可揚柳  
早以春尚  
春一帆偶借  
負花之

見

見石山物從不  
花

昨日宿増上寺  
自神車の南ニ小し  
ほろろろろろ  
昨日宿増上寺  
自神車の南ニ小し  
ほろろろろろ

三月廿六日城南馬場  
城南欲第お差老法  
三月九日子規  
を陸崎の多  
陸崎の多  
三月九日子規  
を陸崎の多

微

風送度重雨  
脚輕病楚何  
多不平心去  
塵香石在也

焦躁難耐

老法情

病

病 病 病  
病 病 病  
病 病 病

宗善告

羨其は面に開る古度の辛夷の花ハ今盛るく  
ふこころ 梅のあつる方下るうに 向う園の雨あけぬら

四月一日日曜在局中法抄正覽

青山猶愛此升る家 疎有瑞香 雨煙色 世客朝来つ寂  
く先を台掃る花 後徒科

雨をうら空のうらうの海をく 色白くし物の花ちる

有 意 不 意 唯 有 唯 有 唯 有 唯 有 唯 有

唯 有 唯 有 唯 有 唯 有 唯 有 唯 有 唯 有 唯 有

唯 有 唯 有 唯 有 唯 有 唯 有 唯 有 唯 有 唯 有

輕風收雨 拙を宣 追勝吟 節記 証之 世多 但之 此 世 敗

律 春 何 世 情 悲 情

好花佛を世可有

春梅軒 昆尚院 時期

旧燕 归来 不失 期門 前 新 所 微 眉 輕 筆 成 暖 春 暗 未

一任 青山 花 較 屋

梅 花 不 下 し ね ち け ば 子 ぞ ち ち ち ち 又 過 ぎ け ち う

四月十日 白雲園 とう花 ち ち ち ち

梅 花 之 山 へ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

池 水 花 を 映 して 影 さ び 々 の あ り ぬ の 中 に 梅 花 ち ち ち ち

ち ち

四月十三日 白雲園 とう花 ち ち ち ち

春 空 の つ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

春 空 かの つのうき ぬまくら ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

梅 花 ち ち ち ち  
溪 の 川 細 し 水  
清 香 ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち

〇

こはあとの門を出入りうらけきをる光街の光ちう

大月のまきゆきに

げを八軒の花にあまをといひ一町のいそをひる

つらつらつをまつらるるまきまの甲斐おやうきまをみる

将下素衣並代愛花名

目尻甘佐堂花人功利元未視若塵

可憐洛下無

多地紅紫一車須此春

徒以春結高花曼 花を散る、柳條緑 征兒未

者見燕兒望日菜

誰面る花味叶却老情唯在何他唯年有竹春空

三年冠 慈又 慈 結帯

小芽ささ花若竹梅西にくかる日るあつと

うゆさ花ちうさる山吹の千枝の細枝の崖に重なる

朝中取ちまうけくすかけあふ花の西にぬれちう

諸あるの小芽ささ花中に日さうけてハまの枝の

希き用並木の枝西細くまはるに花の尚のうらま

いやくと花はける山島の麦せつとに花ちうさ

うんまきささ花の片干落花ささつけまきのゆゆ

ちうはるし花若竹梅の中はちう小芽ささ花の朝日さう

木をささ花若竹梅にけあけさ

花若竹梅にけあけさ

夕日のけしにささ水さほく花ちうさささ

花若竹梅のはるゆくあへに結帯ささ花のく

ちりきし花のあざいやいづろとゆわきあけゆくまのほろ

魚跳る水のゆらさのたまりにちりきし花のゆらにゆら

おとに絶くあさるを空に地のあさる水橋をえんすし 日比

川をみたり 池のほとり 池のほとり 池のほとり

池のほとり 池のほとり 池のほとり 池のほとり

池のほとり 池のほとり 池のほとり 池のほとり

池のほとり 池のほとり 池のほとり 池のほとり

池のほとり 池のほとり 池のほとり 池のほとり

池のほとり 池のほとり 池のほとり 池のほとり

池のほとり 池のほとり 池のほとり 池のほとり

池のほとり 池のほとり 池のほとり 池のほとり

雪峰師次歌

雪峰師次歌

古き歌をうたへし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

此のうけをうらめし、るる花種の小芽うらめしうらめし

白雲



花江の御不皇親風月三旬空送春之雪白  
北の已嘗之徒被彼他人

経所吉山酒館疑部外村人  
晩後空送多病餘賦賦氣逢之春  
春屋永世客叩紫

三月より三月より三月より  
三月より三月より三月より

砂糖 尚難 水区 杉水亦負  
七分外米 砂糖 砂糖 砂糖  
寸五、

献捷場期日  
好冷和老道所世  
崇世結 徳古人去

小多白自全  
却失比之要  
少糖品切木炭  
一分四厘一四  
研糖罨の並お大  
たーまひ

両方の家の下  
わらわら  
わらわら  
わらわら

おまの勝  
こころ  
つるんと末  
いんあこち  
をるあち

甚な幸にして地<sup>〇</sup>と申すは<sup>〇</sup>其の<sup>〇</sup>事<sup>〇</sup>也<sup>〇</sup>  
 おんこと若竹のしけやふの秋<sup>〇</sup>油<sup>〇</sup>ニ並ぶ家の玉に見ゆ  
 甚な幸ふぬぬのそこのお細し今うと人にとりやく  
 ハ仙花こそよとてを寫しぬか空やうとてハ白くと  
 揚の年みさうの社とあうまの水うらうとてカクもさう  
 有ゆの日を清し血の公とけのゆふふけさう  
 おうま徳福田恒存の事<sup>〇</sup>徳福<sup>〇</sup>氏<sup>〇</sup>也<sup>〇</sup>

述言を竹和の生ぬ事得牙先業似一す徳徳年女  
 日<sup>〇</sup>唯<sup>〇</sup>心<sup>〇</sup>應<sup>〇</sup>名<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>行<sup>〇</sup>征<sup>〇</sup>  
 六月十五日甚佳雨多ゆ峡府於新居跡長  
 甚な幸ぬとて<sup>〇</sup>越<sup>〇</sup>峡<sup>〇</sup>白<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>鏡<sup>〇</sup>欲<sup>〇</sup>徳<sup>〇</sup>風<sup>〇</sup>海<sup>〇</sup>子<sup>〇</sup>足<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>甚<sup>〇</sup>佳  
 十七日雪峰和上<sup>〇</sup>清<sup>〇</sup>澤<sup>〇</sup>北<sup>〇</sup>連<sup>〇</sup>帯<sup>〇</sup>達<sup>〇</sup>来<sup>〇</sup>叩<sup>〇</sup>布<sup>〇</sup>門<sup>〇</sup>

北地合文  
後名

此<sup>〇</sup>松<sup>〇</sup>浦<sup>〇</sup>見<sup>〇</sup>示<sup>〇</sup>聖<sup>〇</sup>別<sup>〇</sup>温<sup>〇</sup>名<sup>〇</sup>口<sup>〇</sup>号<sup>〇</sup>良<sup>〇</sup>次<sup>〇</sup>談<sup>〇</sup>詩<sup>〇</sup>中<sup>〇</sup>有<sup>〇</sup>  
 其系人定宮<sup>〇</sup>焉<sup>〇</sup>空<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>道<sup>〇</sup>就<sup>〇</sup>名<sup>〇</sup>声<sup>〇</sup>於<sup>〇</sup>言<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>句<sup>〇</sup>  
 其佳<sup>〇</sup>也<sup>〇</sup>矣<sup>〇</sup>中<sup>〇</sup>事<sup>〇</sup>晴<sup>〇</sup>名<sup>〇</sup>吟<sup>〇</sup>御<sup>〇</sup>指<sup>〇</sup>通<sup>〇</sup>碧<sup>〇</sup>峰<sup>〇</sup>峯<sup>〇</sup>望<sup>〇</sup>經<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>  
 女<sup>〇</sup>在<sup>〇</sup>宮<sup>〇</sup>也<sup>〇</sup>甚<sup>〇</sup>妙<sup>〇</sup>少<sup>〇</sup>雨<sup>〇</sup>声<sup>〇</sup>為<sup>〇</sup>佳<sup>〇</sup>声<sup>〇</sup>  
 六月三十日夜大雨雨甚大<sup>〇</sup>名<sup>〇</sup>者<sup>〇</sup>燒<sup>〇</sup>佳<sup>〇</sup>雨<sup>〇</sup>多<sup>〇</sup>阿<sup>〇</sup>屋<sup>〇</sup>之<sup>〇</sup>  
 釣<sup>〇</sup>時<sup>〇</sup>室<sup>〇</sup>耳<sup>〇</sup>唱<sup>〇</sup>事<sup>〇</sup>原<sup>〇</sup>内<sup>〇</sup>之<sup>〇</sup>事<sup>〇</sup>欲<sup>〇</sup>奪<sup>〇</sup>魂<sup>〇</sup>果<sup>〇</sup>外<sup>〇</sup>世<sup>〇</sup>百<sup>〇</sup>人<sup>〇</sup>不<sup>〇</sup>畏<sup>〇</sup>  
 隣<sup>〇</sup>家<sup>〇</sup>湯<sup>〇</sup>石<sup>〇</sup>尖<sup>〇</sup>声<sup>〇</sup>喧<sup>〇</sup>  
 其<sup>〇</sup>本<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>や<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>雨<sup>〇</sup>す<sup>〇</sup>じ<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>甚<sup>〇</sup>事<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>み<sup>〇</sup>さ<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>中<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>行<sup>〇</sup>く<sup>〇</sup>子<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>身<sup>〇</sup>く  
 聖<sup>〇</sup>弟<sup>〇</sup>名<sup>〇</sup>瑞<sup>〇</sup>徳<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>四<sup>〇</sup>う<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>四<sup>〇</sup>米<sup>〇</sup>う<sup>〇</sup>た<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>ぬ<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>こ<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>い<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>う  
 入<sup>〇</sup>稿<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>ふ<sup>〇</sup>や<sup>〇</sup>か<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>宮<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>有<sup>〇</sup>い<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>雨<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>  
 其<sup>〇</sup>い<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>ぬ<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>人<sup>〇</sup>あり<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>雨<sup>〇</sup>あり<sup>〇</sup>中<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>さ<sup>〇</sup>う<sup>〇</sup>さ<sup>〇</sup>う<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>も<sup>〇</sup>く  
 森<sup>〇</sup>中<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>有<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>雨<sup>〇</sup>細<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>ぬ<sup>〇</sup>れ<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>玉<sup>〇</sup>根<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>有<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>花<sup>〇</sup>ち<sup>〇</sup>る  
 小<sup>〇</sup>さ<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>ち<sup>〇</sup>う<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>あり<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>森<sup>〇</sup>中<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>有<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>

神氣大  
 神氣臣  
 神氣臣  
 神氣臣  
 神氣臣  
 神氣臣  
 神氣臣  
 神氣臣  
 神氣臣  
 神氣臣  
 神氣臣

[ ]

天

分新為多訪曰積家先種升聖快德土惟法差  
 兒君性毛心是物師也類之  
 此君破不台後伯五土惟在境妙世在吾之君五師  
 六月二十九日星比多極區香峰師  
 冥岳岳區大如善打英新極六日天所台  
 十方三世佛一證之普林前  
 七月三日在石高香以色致四  
 卷之三 葬後  
 出現一古丈世世回  
 自作  
 善行  
 生

假酒消自愛：却僅出魂一去又世回  
 却枕藉猶憶存玉鏡臺夕鏡  
 此重紫純高粉誰裁人生恨  
 有在誇聲不耐衣  
 七月廿三日多形多夏三周年有感  
 果公或莫...  
 我千里魄揮氏神  
 世佩子女梅羅  
 七日之友甚多  
 珠

早起 北何方堂

放逐未初天欲明  
掃除打水座敷清  
果知早起三丈位  
飯亦中少地堂

近者山色生陸  
古有陸之聲

青山初不似柳城  
西近前林香露生  
更愛小園多地紙  
清宵能之聽陸聲

子規應言命垂危  
悼

こころの老をいハハるるまや  
ま女の老をいハハるる

美大村思及ハ桂葉  
山有題 在燕京

昔年殘月仍經過  
第空山川就地多  
前代傷官皆  
老去燕京今日感  
感何

如里をいハハるるまや  
ま女の老をいハハるる

估歸

東亞西歐

田苦古序如未の  
平海神祝歌  
多 梧陰秋色

呂門古日之  
估取三采也

行幸西山行宮

誰能

侍側延臣何

三年軍費餘民人  
震旦東林 鞞塵  
何事借庫

似哩尋海 身向烟岸

七月十日 北窗

西場看客唱方催  
拍木一聲紅  
杜宇迂闊  
海樹

傀儡子又陳  
回一何人來

催蔬

愛之

無意

仙

遊

青山依然古  
茅序 西門有  
梅日 傷園  
雅有 自山 時  
穀猶

野野中  
宿遠或係  
儲 且甘  
慨念 憂西  
衣 且 俚  
場

風非 欲富 自 柱 上 中 已 之

總覽上

百如年三  
家也者唯  
在系和和  
知亦身伊  
方方林實  
方智白如  
多

飛心  
珠  
誰

昔の世に月影の如く

高

梅妓書林外塚岸の如く下ふ対山井権園と疏

土用無鰻の空井層の如く前には梅の影も骨身は骨  
是純素の茶茶網梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

望山の如く意影の如く山仙の如く  
月影の如く空井層の如く前には梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

梅の影も骨身は骨  
暁の如く河化

陽の透簾  
蕉の扇  
暁の如く河化

和室の林

月影の如く

梅の影も骨身は骨

暁の如く河化

梅の影も骨身は骨

暁の如く河化

梅の影も骨身は骨

暁の如く河化

梅の影も骨身は骨

暁の如く河化

梅の影も骨身は骨

暁の如く河化

梅の影も骨身は骨

暁の如く河化

梅の影も骨身は骨

暁の如く河化

梅の影も骨身は骨

暁の如く河化

梅の影も骨身は骨

暁の如く河化

自土日  
 有賜  
 表未分一棒  
 珍味豈手凡  
 早建無味哉  
 用包見  
 羊羔美酒  
 美酒也

寒入細  
 傳事  
 寒

山名の小従多しゆゆ畑作のけさる花よりかき  
 夏棚の菖蒲葉の刺竹の穂白を花の傍に  
 八月十四日 宿は向ひの宿 交経細多内  
 碧波拍岸を多海生に之新方新而清屋日  
 伴氏人情溪畑の哨白自防難  
 街浦の柳半菫畑 岸に木止り入菖蒲畑 稔  
 未ぞ新を道宮尾生主の柳也 菖蒲畑  
 卯月新村は昔も在る也 柳三 楚大夫 柳畑  
 申も菖蒲畑の中 柳畑 柳畑 柳畑 柳畑  
 八月十四日 宿 菖蒲畑 道宮尾生主の柳也 菖蒲畑  
 由來百寺と宿邊日 飲三年疾微奈 何宿故人 課

有林如高以田青山 楊 冥世 江 怨 空 造 造 世 死 業 漫 為 是  
 非 乃 竹 款 淳 生 色 石 而 作 零 正 頑 朽 何 征 馬 老 又  
 見 雁 羣 半 還

能く有り  
 紅雲  
 秋の  
 中

地 菖蒲畑 如田 菖蒲 蕉 蟹 有 竹  
 瓜 菖蒲畑 如田 菖蒲 蕉 蟹 有 竹  
 小のそなふ 菖蒲畑 如田 菖蒲 蕉 蟹 有 竹  
 前縁のりんと 菖蒲畑 如田 菖蒲 蕉 蟹 有 竹  
 秋の  
 中







月夜内中不遇少物 幸奈不心極

十月十日 飄庵の小金井の花圃におゐる  
朝多の野の鳥言に打仰く 柿の栞空をぬり  
こちちまの花をく園に 野萩をまき せをををん 汗をこす  
露こちまをを細く せをををん 汗をこす  
清神中けり白く せをををん 汗をこす  
しず土ををををわく 栗山のいやはをををん 汗をこす  
こすををををを せをををん 汗をこす  
佳綿甲し白菜畑と せをををん 汗をこす  
バスを待つ人の せをををん 汗をこす  
佳綿田 せをををん 汗をこす

十月十八日 宿陰

鏡裏驚き果て日 佳傳柿老婦 懐鏡裁今 朝神免

松元流の 難辨 系所 花結り

晴招魂也

男児 死の傷 切烈 千林 地着 香亦 是 君 在 是 處 是

不合 老 若 若 桑

環相 義 義 義

母心 許 四 難 徒 我 極 是 害 苦 故 閑 起 臥 青 蓮 流  
海 中 地 日 看 極 子 風 中 山 鏡 裡 知 有 華 何 策  
破 故 崖 世 科 信 報 以上 秋 冬 以 白 雲 吟 々 空 世 尸  
群 思 天 兵 軍 軍 附

是竹節 杖

老花 秋月 四時 娛 緑水 青山 勝 田 園 一 一 異 乃 依 世  
力 也 未 老 如 不 堪 扶

月夜百五  
二十名あり  
み定のつて  
ありき  
せん

十月十九日 お 詣 掃 而 祈 東 比 乎 神 祀 考 諸 大 作 馬 所 立 比 乎  
神 祀 此 也 卷 益 有 考 院 祭 本 社 祭 禮 有 多 乃  
百 盛 黃 金 嘴 鷹 傷 生 平 所 祭 常 由 朱 委 命 今 如 祈  
福 壽 祠 名 也 中 有 風 俗 在 焉 徒

豐 園 齋 為 桂 所 納 次 殿 本 社 祭 禮 有 多 乃

菊 考 三 嶋 雨 田 老 骨 不 耐 之 芋 粥 加 盛 會 飲 也 神 處 花

毛 低 糞 竹 節 葉 為 樹 寬 寬 黃 菊 竹 籬 簾 下 尚 少 昆

齋 院 山 莊 後 考

十月二十日 觀 廣 祭 會 聖 馬 菊 極 大 院 フリスカ

の 地 子 考 菊 卷 也

神 並 向 右 打 ぬ の 戸 を 閉 之 菊 の 布 衣 大 作 馬 可  
毛 卷 の 扱 ぬ の 光 に 照 ら せ ら ぬ 菊 白 菊 紅 菊 菊 也 あり

小 栗 考  
道 林 林 林 卷 竹 菊 考  
燈 籠 考  
備 上 段 の

大 輪 の 菊 竹 け ぬ 湯 衣 菊 の 袂 錢 ば や 足 ら ぬ け し

白 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と

か け たる 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と

菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と

評 極 大 院 自 似 有 所 似

を 中 上 段 の 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と

天 は 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と

菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と

近 き 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と

フリスカに 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と 菊 菊 と

法 韻 考 又 仙 考 考 考







地下鉄山手線  
のりかえ年  
のりかえ年  
のりかえ年

川にうろたへて四半目の春がうらやま子を送へたー

五粒にちか子をし思へハ冬木を秋半  
のりかえ年  
のりかえ年  
のりかえ年

何ういふ現金と取りにけり餅よりそのつけぬころえ  
お若いとやとらふほりええなり千年の星をあ年の夜

油お曜

油師町

勢い今夕日の出の軍ありあけ走つて鯛さつつか  
神のまき信じて神のまき信じて神のまき信じて

十二月廿四日お甘言の歌あり木村仙吉く  
何れもあうけさハあふふはさつてんを供とるあ年のふんれ

油お

ほとと秋残林檎疎一竿自笑何残虚之座を誰説新経界  
油お不心在魚

野山水窟

松の下徑上訪仙宮山宮人多少林出を語多筆研

第晩有

白江誰入秋京残一別星第回彈半夜不眠の操を

修  
窓外

第晩有

あま年物白年光筆中宮  
秋賚河折元先挿瓶関心唯うけ日あ知寧

昭和十六年辛巳一月

六十六老人三村清三郎

任他華髮鬢髮直催十六年春又回晴日花暄書屋外

簷端早見秋開栞

曙色瑞雲天地開香風吹遍第栞卷秋年表催輕暖

曉の城遠見早栞

曉の城遠見早栞 御在東皇春を回閣臣多を常賢才野人別業

栞の木の葉に露をまじりて川下田の落氷の上になぐりて

荒川に夕風ふちる香船の狭文山紙を吹くはるる

山雲暮暮栞氷川神社

うらりと見るは水地の落氷とけりる栞の影をうらと見る

栞まきのりし下中栞各栞

さむくはるるの園の栞は地栞日いろみく

水手洗のありき水手洗くして神の燈は夜やまを照り

盆歌一月栞

うらりと見る日影のありし栞の影は夜やまを照り

栞の影は夜やまを照り

栞の影は夜やまを照り

栞の影は夜やまを照り

栞の影は夜やまを照り

炭無恥給此春暄回礼今年客石煩退屈年外踏日向晴

開放送式三番栞

一月二日賣八八栞文

若造元来不足言旧時同好第人存在能事実世相于獨賞

東京八八栞

冬(栞栞)文久仙人

平生兔角不音道 近以水播種を為 新年成祝物申上併  
勝るを幸福多

元日ハ舟上直寄花崎の川面しつふみカシメ出小春

初立五山舟大 静永代の 目春日のとけ

銚子カシメ 月崎カシメ

うらハサ暗着出二雨子つる春の陽崎の風田うら

賀西村在因陽左 嶺カシメ

日移澤村分財産急 舟移カシメ 亦名答 舟移カシメ 舟移カシメ

地差以西村泉陽左 迎カシメ

甘藷温鈍食不饑防を右古綿 礼カシメ 舟移カシメ 舟移カシメ

舟移カシメ 舟移カシメ 舟移カシメ

こころと年更すいふまゝとらふこと  
何れもたゞとらふまゝとらふこと  
次韻 仙分八十翁

流泊逃名利延年仙不現 当軒芝岳翠乃足壽仙庐

霜カシメ 霜カシメ 霜カシメ

夕杖カシメ 夕杖カシメ 夕杖カシメ

十日及分カシメ 十日及分カシメ 十日及分カシメ

ヒルつらむ万子るをこまひけむ

中とこころと年更すいふまゝとらふこと

烟更千里池但カシメ 烟更千里池但カシメ 烟更千里池但カシメ

戌カシメ 戌カシメ 戌カシメ

(有憶相見)

舟移カシメ 舟移カシメ 舟移カシメ

舟移カシメ 舟移カシメ 舟移カシメ

舟移カシメ 舟移カシメ 舟移カシメ





二月廿三日 近右極川の因

栂の花ちらくをけりて風ニ花の香を扇す如のなり  
まをまを 栂木林を渡りて日ハ 栂葉の上を夕々しくゆく  
祥雲を右に曲れりて風吹く 栂葉の香をまをまを  
栂葉の香をまをまを 栂葉の香をまをまを  
栂葉の香をまをまを 栂葉の香をまをまを

大寺のまをまをしつゝ 鐘をうて 栂葉の上には栂の花を  
春ぬきを定あけまをハハハハハハ 栂葉の上には栂の花を  
水のうらゆる日みりてまをまを 栂葉の上には栂の花を  
三月一日 栂葉の香をまをまを 栂葉の香をまをまを  
栂葉の香をまをまを 栂葉の香をまをまを 栂葉の香をまをまを

栂葉の香をまをまを  
栂葉の香をまをまを  
栂葉の香をまをまを  
栂葉の香をまをまを

栂葉の香をまをまを  
栂葉の香をまをまを  
栂葉の香をまをまを  
栂葉の香をまをまを

声傳且病 栂花微雨 古禅宮 春を扇す如のなり  
三月廿日 栂葉の香をまをまを 栂葉の香をまをまを  
白江難値旧相知 五十年前の交友 栂葉の香をまをまを  
情を雨に流す栂花 栂葉の香をまをまを 栂葉の香をまをまを

栂葉の香をまをまを 栂葉の香をまをまを  
栂葉の香をまをまを 栂葉の香をまをまを  
栂葉の香をまをまを 栂葉の香をまをまを  
栂葉の香をまをまを 栂葉の香をまをまを

栂葉の香をまをまを 栂葉の香をまをまを  
栂葉の香をまをまを 栂葉の香をまをまを  
栂葉の香をまをまを 栂葉の香をまをまを

花のうらみと目 （千代目） 花の （花）  
花のうらみと目 （千代目） 花の （花）  
花のうらみと目 （千代目） 花の （花）

花のうらみと目 （千代目） 花の （花）  
花のうらみと目 （千代目） 花の （花）  
花のうらみと目 （千代目） 花の （花）

花のうらみと目 （千代目） 花の （花）  
花のうらみと目 （千代目） 花の （花）  
花のうらみと目 （千代目） 花の （花）

小色花

縁

花のうらみと目 （千代目） 花の （花）  
花のうらみと目 （千代目） 花の （花）  
花のうらみと目 （千代目） 花の （花）

花のうらみと目 （千代目） 花の （花）  
花のうらみと目 （千代目） 花の （花）  
花のうらみと目 （千代目） 花の （花）

花のうらみと目 （千代目） 花の （花）  
花のうらみと目 （千代目） 花の （花）  
花のうらみと目 （千代目） 花の （花）

花のうらみと目 （千代目） 花の （花）  
花のうらみと目 （千代目） 花の （花）  
花のうらみと目 （千代目） 花の （花）

子規全集分合新題春草

春草の堤をゆけに暮つて木わりの中に辛老花を  
春草の堤をゆけに暮つて木わりの中に辛老花を  
春草の堤をゆけに暮つて木わりの中に辛老花を

行春

幸老花... 柳に細き雨

雨けの櫻ハ白き芽を...

あたりの雨に幸老の花...

ぼろりと暮日は...

来春は地を...

梅の餌を...

菜の花の白...

所々山吹...

遠見山...

上の山...

梅の...

白蛇 浅茶 雨和 雨和 雨和



浦和 浦和 浦和 浦和 浦和

さきつくと...

毎日...

ちきん...

梅林...

菅苗田...

を雨の...

山吹の花...

うらと...

おん...

箱根...

二島...

池原...

望内宮

吹雪をうらむ後の並あけ車とて花のまじり

小田原の所ハ開けし物なるを様々本に人々も世々

堺へのハきの後ハ春をわと花をりしけりハルル

ハま程々生えしよりけりけりけりけりけり

信見地味けりけりけりけりけり

かにかんにつとのおおきう吾多きうと

日の初の地をうらむとてしをいそぎ

移りけりけりけりけりけりけりけり

いとくわゆるまぢし花の月に君をり

四方の時程なる様々けりけりけり

四月廿六日お西は方うたふん物

はかしの向うをりつとけりけり

柳子のくさむらう午ニ河加らと

徑先の前の楓橋ハま程々今うま

ちんばとありしけり

徑先の前の楓橋ハま程々今うま

五日三日子規庵を命垂死候

けんげ田のうらむ物おぼしめし

五柳ををんばる仰けりけりけり

ふまやかに留士はまはる相持地

矢車の音のうらむ五日を仰けり

柳若葉みさうおぼる物干に小

此のけりけりけりけりけり

○ 柳若葉みさうおぼる物干に小

此のけりけりけりけりけり

五日のけりけりけりけり

五日のけりけり

此のけりけりけりけりけり



あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての

あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての

あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての

あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての  
あつたての







子規唐の会要 翌荒八日二日

梅屋をふつかりと折ちぬ 寝ざんころのゆき荒れをせののり

伊豆の田代より島のあるまをうしうしと

あふし 申すは みる みる みる みる みる みる みる みる みる みる

常の原よりつけむ けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

七月廿九日又仙の強ク守

たのまゆとていひおぼえぬ けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

おぼゆる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

氷をいけすきとていひおぼえぬ けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

相言にせよ世をいふ けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

世の中いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

いぢりうきもたつる けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

杏水

収老蒙

今早白津城田中

田中

白津城田中

白津城田中

芝居園花界著裁香山松院宛宛宛端世端今日飲聲

杏水

傳在右南仙老子未又

傳在右南仙老子未又

雞入梅門系形硯石

欲王母案鍊金疑是仙

雞既既勝修配有荔枝

知名者工然之竹法

志甚高不他正

雞既既勝修配有荔枝

鐘戶とらるる

鐘戶とらるる

鐘戶とらるる

人

八月十日

山東在再既与仙

盡宮并密吳空

途再餉而杯苦

送夏紫紫并微

杏之天海場有

再三贈好物

来一

一月せふの

芳ひる多の

ふれくつひ

於に強く

昔可より

紅

穿岩吐雲は青きもの三ツ礎土用芽のハ  
うろくや一筋むし町の空 **雁**  
錦栲と土くろくやし **長良の**  
日、画端を雁を多る有せる仿大雁山水の  
皆行海名原錦衣を著映を此端を此  
出多あち飛空

陽如  
千鳥

お久々仙人

餅屋  
菓舖

青銅  
黒山

~~全強今由形家 賤鬼の海邊に用ひし餅~~  
~~信見 餅屋の文運 餅屋の電燈~~  
~~行人 餅屋の電燈~~  
久不折を顔漏如千鳥旨行人色又送梅而去 **餅**  
屋行列を車窓に山 **餅**  
屋 上 **餅**  
奈

九日一日

東京 **曙** 秋 **月** 沈

不逢三友飯 **餅** 一鏡金 思出を飛栗日 無如出用心  
留外久我不筆幼 典藉堆中 夢此行 山 南 暮  
夕一完 蕉 升 ち 秋 池 自 述

月と吾をの性ふ秋のさくもの 海ら **餅**  
天とあふくあふ **餅** 風 雨 名 月 **餅**  
すくすの老葉まうに 新葉をす 並赤吹く 秋の和風  
もふと一雨と **餅** 秋 海 棠 日 **餅**

並 昆 蟲 音 月 並 介 介

さうりあむの音けり **餅** 秋 つ **餅**  
雨 是 **餅** 門 ち **餅** 音 **餅** 秋 **餅**

上巻

征客君在在唯此山在在埃而送林：華表長声公叔  
こゝ國を去る一く今ハ金山の如きの神ハありて心

九月七日南高夫人送世世蔡因之北原日可矣

如夢地世世(夢) 夢之何示

別後情何高難解劍樓毫我上途 不秋遊

京明日秋思也以此一夕是世世

下有鏡氏不横表不計名也之弟着極勞情秋分已就

佑吾到好策去牛湯勤り我次之而一柳柳

已泊黃金更泊名琴之在空從出情高軒秋物秋方好不深

何人踏月り

青山古泊久酒運 彼時愛此昆時如地中不其

長屋

庭草日難々

勢利雄從軍於洛南

村犬声を憐大泊成高方漢 飽看今(是)城月

故苑何人仰碧雲 相故往勿

空原吾在在也 滿目 鐵騎折行

酒塞北 月明 律動蒸纏愁

所コは秋末泊を月 陸務陣汽車道くる

崖際子種ハ今 秋葉美ゆ水之怪なる 朝

九月十九日天規庵示会 益歌一ちよ

舞臺多似 桐にるる月秋

世夢上夢上木良水尽 多似の 秋の行人

多似多と 水泡きちぬ



